
彼岸花の恋歌

桜田 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸花の恋歌

【Nコード】

N1362Y

【作者名】

桜田 零

【あらすじ】

高校の屋上から友人に落とされた少女。

次に気づいた時は異世界だった。

ラノベは好きだったし、二つ年上の兄はゲーマーだったから、なんとなくは受け入れられる。

受け入れられるけど、私って一体誰だったけ？

自分の名前を忘れた少女と偶然丘に立ち寄った青年は自分たちの運命も知らず出会ってしまい…

（作者のノリで連載したので更新は不定期になると思います。）

プロローグ（前書き）

恋愛書くのが苦手な作者が気まぐれで書いたので、あんまり期待しないで下さい。

ブローグ

―突然の出来事だった。

学校の友人達と遊んでいて、高校の屋上にいた。

「あつごめん、大切なヘアピン落としちゃった！取ってくれる？」

「いいよ、ちょっと待ってて！」

友達が落としたというヘアピンを取ろうと柵を超えた時だった。

少女は自分のお人好しが仇になるなど思ってもいなかっただろう。

―憎しみが混じった笑顔の友人に落とされるまでは。

『え！？何で？どうしてこんなことに…』

何も言えず、地面に吸い込まれて行った少女は背中に衝撃がはしると同時に意識を手放した。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

少女が次に目覚めた時は、見知らぬ白い花が咲き乱れた海の近くの丘だった。

『ここ、何処なの？』

自分がいた世界とは違うことには気づいた。気づいたのは良いのだが、違和感を感じていた。

『――私は、誰？』

第一話 大切なモノを忘れました。（前書き）

一話目のクセに短いです。

本編から、大方主人公視点だと思っています。

第一話 大切なモノを忘れました。

『ここ、何処なの？』

気がついたら知らない場所にいた。白い花が咲き乱れている丘みたいな所。潮の匂いもする事からどうも海の近くみたい。

どうして此処に居るのかを整理するためにこれまでの事を思い出してみた。

『えっと、昼休みに遙達と屋上に行って…ああ、そうだ！遙が大切にしてたヘアピンを取ろうとして柵を越えたんだった。越えた直後に遙に押されて……。』

だんだんと思い出してくるのと同時に、怒りがこみ上げて来た。握り拳が固くなる。

だけどすぐ、解いた。今は目の前に遙が居るわけじゃないし、多分あの時に私の人生は終わっていると思う…。

とりあえず、此処は学校じゃないので、どこにいるのか辺りを見回してみた。

最初は天国だと思っていたけれど、あまりにも感じるモノ全てがリアルだからきつと違うような気がする。でも、日本にはこんな綺麗な所があるなんて聞いたことがない。有り得ないかもしれないけど、この状況でこの選択肢が一番合っているとオタク知識が言っ

いる。

――異世界トリップ

携帯小説やラノベによくあるあれだ。モブだった私がまさかっと思っただけ、実際に見ているのは学校でも、ましてや日本でもない知らない風景。これじゃあ、認めざるおえないよね…。

普通の人だったらきつと、今頃途方に暮れているに違いないと思うけど、ラノベ大好きだったし、二つ年上の兄がゲーマーだったから「異世界トリップバチコイ！」なんだよねえ。自分で言うのもないけど、こんなに簡単に受け入れても良いのかな？

此処を離れて今いる所がどんな所なのか知りたくて、地面から立つとある違和感に気づいた。

小さい頃からの私の記憶はある。背中まで伸ばした髪だってちゃんと黒いままだし。私が着ているのは高校の制服のまま。

変わった所なんて一つもない。私は私のままだもん！

ってあれ？いつもなら「だもん！」っていつも自分の名前入ってたよね？そういえば…

『――私は、誰？』

どうやら、元の世界に自分の名前を置いて来たらしいです……………。

第一話 大切なモノを忘れました。（後書き）

漢字ミスなどのご指摘がありましたらお願いします。

あと、検索ワードの「異世界転生」を「異世界トリップ」に訂正させて頂きました。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。（前書き）

11 / 14 一文足しました。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。

名前を忘れたことになりのショックを受けて花が咲いた丘に立ちずくんできた。

秋生まれの私に父がつけてくれた名前。母や兄が愛情を込めて呼んでくれた大好きな自分の名前をいとも簡単に忘れてしまったことに凄くショックを受けた。

『父さん、母さん、兄さん……ごめんね……ごめんなさい……』

視界が一気に滲んでいった。目尻から私の体温と同じくらいの水が頬を濡らしていった。

|||||

一体どれだけ泣いていたんだろう？落ち着いた時には辺りは薄暗くなっていた。

とりあえず、街の方まで出ようと思った。こんな所にいても何も始まらないし飢え死にしちやいそう！

決断からの行動は案外早いもので、道のある方へ歩き出した……

……… かったのにい。

すっかり異世界だつてこと忘れてた！

私の前に魔物が飛び出して来たんです。

狼みたいだけど…何か少し小さい？でも口から見える牙は見た目に合わず鋭い。

狙いはもちろん………どう見ても私のようです。orz

一方の私は当然丸腰。そもそも、武器とか持ってたら銃刀法違反で今頃刑務所だよ！私だって平凡な日本人女子校生だからね！
オロオロしていると狼君（可愛いし、名前なんて知らないの。）がこちらに向かって飛び出して来た。
トリップ早々殺されるなんて思ってた。もう駄目と思ってぎゅっと目を瞑った。

――ザシュッ――！

何かが切れる音がして、思わず目を開けてしまった。

飛びかかって来ていた筈の狼君は鮮やかな赤い液体を撒き散らしながら倒れていて、その後ろにその原因と思われる

「大丈夫か？怪我は…？」

綺麗な赤毛の青年が立っていた。

青年は、私より頭一つ分くらい背が高い。腰ぐらゐまで伸ばしていると思われる赤毛の髪はうなじの所で一つに結つてある。瞳は…
…エメラルドを思わせるような深い翠。感じはまんま西洋系で…
…。

「本当に大丈夫か？もしかして具合悪いのか？」

「大丈夫です！ごめんなさい」

つい、彼の容姿に見とれてしまった。ああ、恥ずかしい！
彼のテノールの優しそうな声に我に返って慌ててしまって、やっ
と返事をした有り様だ。

「何故こんな所に一人で居るんだ？それはさておき、きっと家は近くだからそこまで送ってやるよ」

「……………」

彼から少し視線を外した。

申し出は嬉しかったけれど、今の私に帰る場所なんてない。そんなことを言ったら、此処にいる理由を絶対聞かれると思う。それに名前も…。

正直、この人に言っただけの良いのか不安だった。

「どうしたんだ？家が分からないのか？」

彼の声からして少し焦っているみたい。

話さない事には何にも始まらないので、とりあえず馬鹿にされるの前提でぶっちゃける事にした。

「帰る家は無いんです」

彼を真っ直ぐに見て言う。案の定、彼は不思議そうな顔をした。そんなのお構いなしとでも言うように私はそのまま話し続ける。

「今から言う事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失ってる間にこの世界に来ました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る所なんて……無いんです」

本当は事故じゃなくて遥に落とされたんだけどね。自分で言っておきながら何だか悲しくなってきた。

恐る恐る彼の表情を見ると、凄く悩んでいるような顔をしてた。しばらく考えて彼が口を開く。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい……」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

私は目を見開いた。だって馬鹿にされると思ってたんだもん！

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵といるのは嫌か？」

「そんなことはありません！宜しくお願いします！！」

嬉しくてとびっきりの笑顔で笑うと彼は少し視線をずらしたよ
うな気がした。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。（後書き）

やっとキーキャラクター出て来ました。

お気に入り登録してくださった方、本当に感謝×2です！（
感想などお持ちしております！）

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。 (青年 side) (前書き)

二話を青年サイドでお贈りします！

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。(青年 side)

あれは昼過ぎだったと思う。依頼を達成して、依頼があったファ
ージの街に帰ろうとした時だった。

昼間だと言うのに白に近い黄色い流星が流れ落ちていたのを俺は
確かに見ていた。いや、厳密には流星じゃなくて何かの魔法の発信
源だと思う。

ほっとけば良いものを不信に思った俺は、結局流星の収束地点に
向かって走り出していた。

余計な事に首突っ込んで最後の最後で痛い目に合うのは分かりき
っている事なのにこの時だけは行かずにはいられなかった。

|||||

そのまま流星を追っていると、とある花畑に向かっていることが
分かった。

あそこは、沢山の種類のリコリスが咲く事で有名な場所だ。確か
この時期はナツズイセンという薄桃色のリコリスが咲いていたと思
う。

そんなことを考えながら目的地に向かって走り続けた。

この調子だと日が沈む前に着くと思う。

|||||

リコリス畑の入口に差し掛かった所だった。

草むらからウルフの幼体が出て来て花畑の方へ向かって行つたのを見た。そこまでは何とも無いと思つていたが、さつきから俺の第六感が警告を促しているような気がしたから急いでそのウルフの幼体を追いかけた。

案の定、あと少しでウルフの幼体の餌食にされる奴が出るところだった。

獲物に飛びかかったウルフの幼体を居合い切りで切り捨てた。

血飛沫を上げて倒れ行くウルフの幼体の餌食を見た途端、俺は絶句した。

――そこに立っていたのは、少し幼さが残つた神秘的な少女だったのだから。

背中まで伸びた漆黒の髪に、光加減によつては亜麻色に見える黒い瞳。見たことも無い服からはあまり体型が分からないが、きつと華奢な体をしているのだと思う。

おっと、彼女の容姿に見とれて話しかけるのを忘れる所だった。

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。(青年side)(後書き)

長かったので切りました。

1作目が不調だったせいか、検索数を見てビックリしました！皆さんに読んで頂いて本当に感謝しきれません(´・`・´)

お気に入り登録してくださった方々、本当にありがとうございます

(T^T)

第四話 俺は少女を連れて行くことにした（青年 side）（前書き）

三話の続きです。

第四話 俺は少女を連れて行くことにした（青年 side）

「大丈夫か？怪我は…？」

とりあえず何処にも怪我は無いか聞いてみる。が、返事が無い。まさか、彼女の目の前で魔物を切った事に対して気分が悪くなったとか！？

心配になってもう一度聞いてみる。

「本当に大丈夫か？もしかして具合悪いのか？」

「大丈夫です！ごめんなさい」

彼女はやっと返事をしてくれた。容姿どうりって言って良いのか声もまた可愛い。

どうやら、彼女に怪我は無いようで少し安心した。が、まだ早いと思う。何故なら彼女を家まで送り届けねばならないからだ。

「何故こんな所に一人で居るんだ？それはさておき、きっと家は近くだからそこまで送ってやるよ」

「……………」

彼女は俺から視線を外して悲しそうな顔をした。

数分たって何かを決意すると俺に向き直って真面目な視線で話した。

「帰る家はないんです」

俺は不思議に思った。服の質からしてそれなりに裕福そうなこの少女に帰る家が無いなんて考えられないからだ。

俺が不思議に思う事は想定内だったのか、彼女は話し続ける。

「今から言う事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失ってる間にこの世界に来ました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る場所なんて……無いんです」

そう言っている彼女の顔は何処か寂しそうだった。

『なんとかしてやりたい』

考えられるだけ考えて、ある案を出していた。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい……」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

彼女は目を見開いた……がそれ以上に俺自身が驚いていた。

近くの街の修道院にでも連れていけばきつと面倒を見てもらえると思うのに。

この時、俺は彼女に一目惚れした事に気づいていなかった。

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵といるのは嫌か？」

「そんなことはありません！宜しく願いします！！」

その時見た彼女の笑顔が眩しくて目を背けたのと同時に、心臓が跳ねた理由を俺はこの時知る術が無かった。

第四話 俺は少女を連れて行くことにした（青年 side）（後書き）

三話に書き忘れましたが感想などお持ちします。

第五話 新しい名前をもらいました。(前書き)

区切ろうかと思ったのですが、切れ目が無さそうなので結構長くなり
ました…………orz

第五話 新しい名前をもらいました。

彼は何かを思い出したように私に向き直って話をきりだした。

「そういえば、まだ名乗って無かったな。俺はラグ。今此処にいるアグシリア大陸の王国レストの傭兵だ。で、お前は？」

やっぱり聞かれました！私、自分の名前が思い出せそうにないです。本当に困りました。orz

私が困っているのを見て、彼…ラグさんはまた心配そうな顔をした。

「どうしたんだ？本名名乗るのが嫌なら偽名名乗ったって良いんだぜ？」

「えっと……」

本当に困った。「名前、忘れちゃいましたってへっ」なんて言った矢先には、変な奴には近づくなつて絶対見捨てられる……。

うわああああ！！嫌っ！！パス！！それだけは勘弁！！こんな所で飢え死にだけは御免よ！！

「クスッ…アハハハハハ……！！」

自分のオーバーな考えに浸っていたらいきなりラグさんに笑われてしまった。それかなり豪快に……。

「な、何笑ってるんですかラグさん！？」

怒った私は兄と喧嘩するときのように自分の顔をラグさんの顔に

近づけた。

ラグさんは驚いたのと同時に顔を少し赤くして目を私から反らした。

『あ、あれ？勝っちゃった？』

兄と違う反応を示して少しやりすぎた事を反省する。
視線を反らしたままでラグさんが言った。

「あー、その…、笑って悪かったな。お前の百面相がスゲー面白くて…」

「こちらこそ、怒り方キツくてすみませんでした。……………私の顔が原因か。何か凹むなあ」

最後の独り言は聞こえなかったらしく少し安心した。

「で、お前の名前は？」

どわあああ！！ラグさん、話を戻さないで！！

これ以上は変な顔を見られたくないので結局白状する事にした。

「此処に来た衝撃が何かで名前忘れたんですけど……………」

ラグさんは目を見開いていた。やっぱり変人扱いされるう！！

「そうか…。家や知り合いだけじゃなくて名前まで……………」
「ほえ？」

何だか知らないけど、同情を買ってしまいました。……………うん、これを期にすぐネガティブになるの止めよう。

そんな事を考えていたらラグさんが口をきった。

「……………リコリス」

「えっ？」

「リコリス、お前の名前だよ。名前忘れたんだろ？だったら俺が付けたって構わないよな？名前無いと困る事も多いと思うし……………駄目か？」

ラグさんは少し不安が混じった笑顔を向けてくるけど、私は凄く嬉しかった。

私の名前を考えてくれたし、リコリスは秋生まれの私にぴったりだったから。

リコリス…ヒガンバナ科ヒガンバナ属の総称のことでももちろん彼岸花もこの中に入る。そういえば、此処の花はなんとなく夏水仙に似てるような気がする。

私は笑って答える。

「いいえ！嫌じゃ無いです！むしろ凄く気に入りました」

「そうか、良かった」

そう言ってラグさんも笑ってくれた。今頃だけど、美男イケメンの笑顔って凶器だよ！！絶対！！

「それじゃあ改めて、宜しくな！リコリス。それと、これから長い付き合いになると思うから、さん付けも敬語も無しで」

「うん！！宜しくね、ラグ！」

その後、私はラグに連れられて、近くの街に向かった。

第六話 街に着きました。

目的地のファージという街に着いたのは真夜中だった。

真夜中って聞くと同年代の某アイドルグループのあの曲とか、某忍者少年のアニメのエンディングとかを思い出す。J-POPが好きだった私は、つい数時間前のことなのに思い出しただけで郷愁にかられていた。

そんな顔をしていたのか、ラグが心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫、大丈夫！ちょっと馴れない所来て今後一人になった時大丈夫か心配になったただだから！」

「本当か？それともうそんな先のこと考えてんのか？当分はそんなことねえからもっと気楽にいけよ」

何だか見透かされてる気もするけど、それ以上に呆れられてるような気がする。

|||||

宿の受け付けを済ませたラグが私の所へ戻って来た。二つ持っている鍵のうちの一つを私に渡して、部屋まで連れて行ってくれた。ラグは隣の部屋にいるらしい。

今日は色々あったから凄く疲れてたみたい。せめてブレザーぐらい脱げば良いものをベッドにダイブした瞬間に寝てしまった。

|||||

次の日、朝日と共にラグに起こされた。元いた世界では、家から高校が近かったから冬でも起きた時には既に朝だったんだよね……お陰で凄く眠い……。

最初に連れて来られたのが婦人服屋だった。お金についてある程度の知識を教えてもらい、お金をもらってラグには外で待つてもらった。

「いらつしゃいませ!!」

うん、どの世界でも挨拶と営業スマイルは大切みたい。

そんなことを考えながら手っ取り早く服を選んだ。

ラグと一緒に旅をするんだから動きやすさを重視してズボンにする。女の傭兵もいるから女性用のズボンもあるんだって!!

上下三着ずつプラス寝間着を買ってそのうちの一着をその場で着て外へ出た。

今の私は、白のブラウスに茶色のボタン付きベスト、赤の細いリボントイにズボンもブーツカットの茶色の長ズボン。

「ごめんラグ、待たせちゃった?」

急いで私はラグの元へ駆け寄る。ラグは、そんな私のことを微笑ましそうに見ていた。

「いや、そんな……って言いたいとこだけど、ちょっと長いような気がしたから待つてる間に俺の用事も済ませて来ちゃった」

「え!? 結構待ったって事だよな? ごめん……」

「大丈夫だって、そんな落ち込むなよ! クスッ……リコリスってそう

いう所が可愛いよな」

そう言って私の頭を撫でるラグ。昔よく兄がやってくれていたそれは何だか心地良かった。

「うん、十二歳くらいの妹がいるっていうのも何か良いかもな」
「へ！？」

ラグの発言に驚いた。今、十二って言っただよな？あれ？まさかとは思っけど…………。

「ねえラグ、私って何歳に見える？」
「え、十二だろ？」

うん、やっぱりそうだ。間違われてる。あ、でも反応面白そう！

「私、十七だよ」
「えっ……………」

はい、凄くあっけらかんとした顔をしました。

……………こりゃ、誤解を解くのが大変そうです。

第七話 街で買い物中です。(前書き)

一話一話が段々長くなってるような…

第七話 街で買い物中です。

あれから、なんとか誤解は解けた訳なんだけど…………。

「リコリスが三歳年下だなんて…。まあ、妹分ができた事には変わりねえか」

なんて言ってラグは一人で何か納得してた。とりあえず私は妹分決定らしい。二つ上だろうが三つ上だろうが兄がいた私にしてみればあんまり変わらないような気がするのは気のせいかな？

そんなことを考えてため息をつくところラグが私の手をいきなり掴んだかと思うとそのまま私を引っ張って走り出した。

「リコリス、次は武器屋に行こうぜ！俺について来るんだ、何か護身用に持ってた方が安心だろ？」

「分かった、分かったけど走る必要無いじゃない！」

楽しそうな嬉しそうな顔をしたラグはどこか子供っぽく見える。

これじゃあ、私がお姉ちゃんみたいじゃないかって突っ込んでやりたかったけど、ラグの様子からして聞いてくれそうになかったから心の内にそつと秘めておいた。

走っていて思うんだけど、私未だにローファーだよ！まずそつちをどうにかして欲しいよ。

またため息をついて言おうと思って立ち止まろうとしたけど、ラグの力の方が強くてそのまま引っ張られてしまった。

この調子だと武器を買ってからになっちゃいそう。

「……………」

うん、居心地悪い。日本人には全く縁のない場所だから、正直早くこんな所出たかった。

そんな私にはお構いなしにラグはあれはこれとは武器を持って来る。

「リコリス、レイピアなら軽いからお前がも扱えるだろ？」

「ごめん、私フエンシングなんてやった事無いから……」

「じゃあ、スローナイフ……」

「ダーツで真ん中になんてろくに当てた事無いし……」

かれこれ一時間ずっとこんな感じだった。一応、中学は剣道部だったけれどあれの基本は刀だし、この世界にはないと思う。

で、結局私が選んだのはサーベル。そんなに重くないし、基本的な所は長剣とさほど変わらないみたい。片手で扱うっていうのが問題だけど、馴ればなんとかなると思う。

「本当にそれで良いのか？他に扱いやすいのあ「これで良いの！！」

ラグが言い終わる前に言ってやりました。このぐらいの我が儘なら大丈夫だよな？何だか店に入った途端、ラグが心配性になったような気がする。

納得のいかない顔をしながらもラグは会計を済ませて買ったサーベルを私に渡してくれた。

受け取った後、来るときに思った事をねだってみる。

「ラグ、靴と下着欲しいんだけど……………」

そついうとラグはしまったというような顔をした。ああ、やつぱりそこらへんの大事な事忘れてたんだ…。

その後、ラグに連れられて下着と靴（もちろん、ラグには外で待つてもらった）を買った。

そついえば、宿代含めてラグにお金出して貰ってばかりだったけれど、ちゃんと返さないとまずいよね。

「ねえラグ、お金出して貰ってばかりだけど返すの遅くなくてもいい？私お金持っていないから」

不安にラグを見上げる私にちよつと赤面して視線をずらしたラグはそんな私の頭を撫でた。

「き、気にすんなつっただろ。俺自身そんな使わねーから困る事ねえし、お前がこつちで生活できるまで俺は面倒みるつもりだから」

ラグはそこまで考えてくれてたんだ。それが嬉しかった半面申し訳なかった。

「ラグ、ありがとう」

「いいってことよ。さあ、帰ろうぜ」

笑って頷くと、ラグは私の手を取って宿へと歩き出した。

第八話 俺の妹分…だよな？(ラグside)(前書き)

三回目のラグ君サイドです！

第八話 俺の妹分…だよな？（ラグ side）

リコリスを保護してからずっとこんな調子だった。アイツの表情一つで焦ったり、嬉しくなったり…まるで俺が俺でなくなっただけだった。

リコリスの生活用品を買い揃えて宿に戻る途中、一瞬だけリコリスを見る。十七だと言われたがやはり実年齢よりも幼く見える。リコリスが言うには、彼女の身長は平均はあるらしいから、彼女の世界の人間の身長が伺えてしまう。

「ラグ、宿見えてきたよ！」

そう言っただけで繋いでいた手を離して宿の方へと走って行く。見た目もそうだがその行動もどこか幼く見える原因かもしれない。

「ラグー！！早く早く」

「ああ、今行くから待ってる！」

無邪気に笑う彼女が可愛いくて仕方がなかった。俺自身妹も弟もいたけれど、いつともいがみ合っていたような気がする。

『きつと俺はこんな妹が欲しかったのかもしれない』

そう思い込んで上手く丸め込んだものの、やはりと言うべきか腑に落ちない所があった。

何故、リコリスの笑顔を見る度に心臓が跳ねるのか。何故、リコリスの行動で俺の顔が熱くなるのか。何故、

う。きっとリコリスは此処よりも大きな街を見たらきっとはしゃぐと思う。想像するだけでも心が弾んだ。

でも、上手く逃げ切れるのか？王都はあの人がいる所だ。見つかったら俺だけじゃなくてリコリスも何をされるか分からない。

いつの間にか、俺自身の事ではなくリコリスの安否を心配していた。

『当たり前か。だってリコリスは俺の妹分だから』

たった一日しか一緒に過ごしていないのにリコリスを大切に思っている自分がいた。

第九話 王都に向けて出発しました。

朝起きていきなりの事だったから、急いで荷物を纏めていた。

「何よ何よ何よ！何でいきなり『あ、今日王都に行くから』って言うのよ！！昨日のうちに言えっつーの！！」

文句タラタラ言いながらも荷物を纏める手の動きが鈍くならないのはサボリ癖の酷い兄がいたからだと思う。

本当、兄さん大丈夫かなあ？家事全般はできないし、部屋に籠もって大人しいと思ったらゲームしてるし、気づいたら私のおやつ食べてるし！！

あー、やっぱりあの駄目兄貴の事考えてたらムカついてきた。

今日は朝から腹がたちっぱなしなのに。

「リコリス、支度終わったか？」

はい、来ましたよ。私が朝からムカつかなきゃいけない原因を作った張・本・人が！

「終わりましたけど、何か？」

「もしかして、おこっつ」「当たり前です！！！」

ラグが言い終わる前に言っっちゃった。そのまま立て続けに文句も言っっちゃる。

「だいたいねえ、今朝いきなり言うのがいけないのよ！！昨日のうちに言いに来るとか「言いに来たけど、リコリス寝てたし」五月蠅

い！だったら起きてるときに言ってよ！私の準備が遅くなって出るのが遅くなるでしょ！？そうなたらできるモノもできなくなるでしょ――！」

途中口をはさまれたがマシンガンのごとく言ってやる。だって、このぐらい言わないと絶対次もこんな感じで出るの遅くなるもん。

「いい？分かった？」

「ハイ………」

返事をしたのは良いものの、部屋の隅っこで膝抱えてラグが落ち込んだから更に出発の時間が遅くなったのは言うまでもないと思う。

|||||

「あ、そういえば魔法について教えて無かったな」

「え！？この世界には魔法があるの？」

道中、ラグが思い出したように言っただセリフに思わず目が光った。だって魔法だよ！魔法が有るんだよ！ゲーマーや中二病なオタクなら一度は使ってみたいアレですよ！

「リコリスのいた世界には無かったのか？」

「魔法っていう考えたいはあったけど、無かったよ」

そつ言つとラグは興味深そうな顔をした。

「分かった。それじゃあ、基本的な所からな。まず、魔法を使役するには自身の魔力を消費するんだが、それは個人で差が有る。そんなのもって、魔力を多く消費することによって強力な魔法を使役することができんだ。但し、魔法を使役し過ぎて魔力が無くなってしまうと、最悪命を落とすから気をつけてくれよ。……と、こんな感じかな？」

ラグの説明で魔法と魔力については分かった。魔法を使い過ぎるって怖いね。

「分かった。ねえラグ、属性とかは無いの？」

「まあ、待てよ。それを今から説明するんだろ。……属性についてだが、炎、水、地、風、雷、光、闇、無の八属性が有るんだ。そのうちの五つは炎↓水↓雷↓地↓風↓炎のような感じで強弱関係がループ状になっていて、光と闇はお互いを打ち消しあう関係。無属性は有利不利は無く、相手の属性に関係なく一定の効果を使えるんだ。でも発動時間も規模も他の属性に比べて小さいっていうデメリットが有るのを忘れないで欲しい」

「うん、分かった！」

「最後に使用方法だけど、基本はイメージ。詠唱はイメージしやすくするためだから、できるなら要らないんだ」

ラグに魔法について一通り教えてもらった後、ちょっと試してみたら規模が小さいのは、一通りできた。

今度は実践でって思っていたら丁度良く魔物が出てきた。

「リコリス、実践してみるか？」

「うん！！」

私が頷くと、ラグは長剣を私はサーベルを抜いた。

第十話 トリップパーに魔法はお馴染みのようです。（前書き）

後半はシリアス&残酷描写があります。

第十話 トリップーに魔法はお馴染みのようです。

ラグが魔物に向かって行く…と思ったら、ダラリと長剣を下げて
いる。アレ？攻撃するんじゃないの！？

「リコリス、お前一人でやってみろよ。どうせ、LV・1スライム
だし。実践には持ってこいだろ？」

や、ラグくん、それはないと思うよー。

LVで言うなら私も1だよ！いきなり一人でやれとか無理だから！

「兎に角やってみろよ！無理そうだったら俺がやるから」

そうやって背中を押されて一步前へ出る。

ラグの様子を見ると私が攻撃するまで何もしてくれないらしい。

何だよ！どこの鬼教官だよ！私は誉められて伸びるタイプであって
いきなり無茶苦茶しても身に付かないのに。

何もしないといくらスライムでもやられてしまうので仕方無くや
る事にした。

えっと、イメージイメージ。雷の球を放つ感じで……。

「サンダーシュート！！」

イメージ通りの雷の球が正面に出現、発射してスライムに当たる。
魔法に当たったスライムはそのまま気絶してしまっていた。

「初めてにしては上出来だと思うぜ。後は魔力のコントロールだけ
だと思う」

そう言われて頭を撫でられる。剣ダコのできているその手に頭を撫でられるのはとても心地良かった。兄にされる時とは違う感じがしていたけれど、気にしない事にしていた。

「さて、そろそろ行くか。出るのが遅くなるとできるモノもできなくなるんだろ？」

「それ私のセリフ！！」

私とラグはじゃれあい（？）ながら王都へと向かった。

|||||

「リコリス、下がれ！」

ラグは私を背後に隠すと自分は長剣を抜いた。

王都へ向かう途中にある森で私達の前に飛び出して来たのはゴ布林で、人型に近い姿をしているブサイクでチビな魔物だった。

ラグは相手の攻撃をステップで華麗に避けては相手の隙を狙って一閃する。

ゴ布林はその辺の魔物と違ってある程度（と言ってもサル程度）の知能が有るから攻撃がクリーンヒットし難いみたい。

それにラグ一人対ゴ布林三体は流石にキツイのではないかと心配でしうがなかった。

『私にできる事はないかな？』

そう思った瞬間、私は行動をとっていた。一瞬、昔からそうして

いたかのような錯覚に捕らわれそうになった。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』――！」

私が唱えた後、ゴブリンの足下に黒い魔法陣が浮かんでそこから出てきた黒い触手状の物がゴブリン達を絡めて縛る。

ラグは驚いて私の方を見ていたけれど、折角のチャンスを逃すまいとゴブリン達を目掛けて駆ける。

ゴブリン達の間を縫って行きながら横風で長剣を振っていく。ラグが通り過ぎた傍から鮮血が飛ぶ。次々とゴブリン達の奇怪な断末魔が上がる。

近くで見ていて吐き気がした。私にとっての非日常が今、目の前で起こっていて、これからこの光景が日常になるんだと思うと少し悲しくなった。

私が向こうの世界で生きていることになっているのかどうか分からないし、その前にこの世界から帰れるかも分からない。だとしたら、私は……。

向こうにいたときの自分にサヨナラをするつもりも含めて、一つの魔法を詠唱する。

「燃え盛る槍よ、彼の者を貫き焼き尽くせ『フレイムランス』――！」

空中に出現した赤い魔法陣から槍の形をした炎がラグに切られて倒れているゴブリンに向かって降り注いだ。さっきのような断末魔は聞こえ無かったけど、肉の焼ける気持ち悪い匂いが鼻を刺激した。さっきまで戦っていた敵と共に昔の私が燃えているような気がした。

長剣についた血を振り払って鞘に収めたラグがこちらに向かって歩いてくる。ラグは凄く難しい顔をしていた。多分、『フレイムランス』を使った意味を理解したのかもしれない。あるいは、私が凄

く打かない顔をしていたのかもしれない。

「……………行けるか？」

ラグはただ一言言っただけだった。

「うん……………」

どこか暗い返事をしたときだった。

ガバツ！！

ラグが私の腕を掴んだかと思ったら、気づいた時には視界が真っ暗だった。少し経ってラグに抱きしめられているのを理解する。

「泣きたい時は我慢しねえで泣けよ。全部、俺が受け止めてやるから」

その言葉が嬉しかったのか、私の目から涙が一筋零れる。それが引き金になって涙はどっと溢れてきた。

ラグは私が泣き止むまでずっと抱きしめていてくれた。

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。(前書き)

やっと、「恋歌」に繋がる部分出てきました！
()

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。

森の開けた所で今日は野宿をすることになった。なんだかんだ言
って、結局は私のせいで今日中に王都に着けなかった。私が泣き止
むまでラグはつき合ってくれたんだもん。凄く感謝してる。

今日の夕食は携帯食の干し肉とパンだった。固くて美味しいとは
言えないけれど、背に腹は代えられない。

「悪いな。こんな物しか無くて。リコリスの分だけ何か美味しい物買
っとけば良かったな」

「そんなことないよ！私の分まで用意してもらって何か申し訳ない
って思う」

そう言って笑うと、「そっか」って言ってラグも笑ってくれた。

食事も終わって二人で寄り添って夜空を見ていたら、頭の中で詩
が出来上がっていた。

高校では軽音部に入っていたから、オリジナルの歌をよく友達と
作ってたなあ。私が詩を書いて、他の子達が曲を付けて…………。

そんな事を思い出しながらラグに貰ったノートとペンを取
り出して浮かんだ詩をサラサラと書いていく。

隣でラグが不思議そうにこっちを見ている。

「リコリス、何書いてんだ？」

「ん？ヒミツー！」

私がちよつと意地悪したら、ラグはそのまま拗ねてしまった。失
礼かもしれないけれど、ラグって拗ねると可愛い！！

ちよつと笑いを零してまた詩を書き始める。もちろん、日本語だ

からラグは読めない。だから、さつきから「何書いてんだ？」「ヒミツー！」のやり取りばかりしてた。

三十分ぐらいで詩は出来あがった。もちろん、メロディーはもう考えてある。

私はこの森の美味しい空気をいっぱい吸って今できたばかりの歌を歌い始める。

♪ 幼い僕が喧嘩したあの日

頭を撫でたその手の平が

「ごめんね」と伝えてきた

帰りたいと思っていても

帰れないと分かっているから

「今」を生きてこう、

自分らしく

どんな辛い事があつたとしても

「今」を生きてこう、

後悔しないように

だって今は「お帰り」って

言ってくれる人がいるから♪

歌い終わって、ラグの方を見る。

ラグはそつと瞳を閉じて心地良さそうに聞いていたみたい。目を瞑っている横顔もなんだか綺麗だった。美男イケメンは何をしても格好いいんだと思うとなんだか平凡顔の自分が悲しくなってきた。

瞼が持ち上げられ、露わになった翠の瞳が私を捉える。

捉えられた瞬間、ドクドクという音が聞こえてきた。ラグから顔

を逸らせられないのは何で？

私が体験したことも無い事に混乱してい時、先に沈黙を破ったのはラグだった。

「もしかして、さっき書いていたのはそれか？」

「う、うん」

ラグの質問を答えてやっと、視線を逸らす事ができた。それと同じに高鳴っていた鼓動もだんだんと収まる。

隣から楽しそうな声が聞こえてきた。

「お前の歌声って心地いいな。また今度、聞かせてくれないか？」

驚いてラグの方を見たけれど、最後の一言が凄く嬉しくて蔓延の笑みで頷いた。

「うん、もちろんだよ！」

微笑ましそうに私を見てたラグは、私の肩をだいて引き寄せると反対の手で私の頭を撫でた。

「ああ、約束だぞ。今日はもう遅いから寝ろよ」

「分かった。お休み、ラグ」

「ああ、お休み。リコリス」

そういうやり取りをした後、ラグの肩に頭を乗せて目を閉じた。
明日の王都、楽しみだな。

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。（後書き）

作中でリコリスが歌った歌の詩は作者のオリジナルです。

活動報告にフルバージョンの歌詞を掲載しますので、興味がある方はぜひのぞいて見て下さい！

第十二話 隣のアイツは騎士でした。

私達が王都フアーランドについたのは昼すぎだった。

王都はとても綺麗で華やかかつ賑やかだった。街は赤茶色の髪の毛の青年が主人公の某RPGの王都みたいで、中世ヨーロッパ風のお城に色とりどりのレンガの家、広場は綺麗に整えられていて街全体が一つの芸術品みたいだった。

「すっごーい！綺麗……」

「な、綺麗だろ？」

街に見とれていた私をラグは微笑ましい物見るように見ていた。

そんなラグの顔を見てちょっと私の眉間にしわが寄る。ついでのように羞恥で顔が熱くなったのは言うまでもない。

「何こっち見てるの？恥ずかしいから見ないでよ！」

「悪い悪い。つい…な」

そう言っつて、ラグは笑ったけどちょっと照れてるみたい。この数日で分かったけど、ラグって照れると自分の頭をかく癖がある。今だって、頭をかくてるもん。

「ラグ、行こう！」

ラグに手を差し出す。ラグはちよつと躊躇ったけれど、そつと微笑んで

「ああ、行こうか」

[illegible]

本當はラグについて行きたかったけど、大事な用事だから駄目って言われちゃった。その代わり、明日傭兵ギルドに連れて行ってくれるって！これで仕事ができたら万々歳だよな！人に頼ってばかりの駄目人間にならなくて済むんだよね！

上機嫌にスキップしながら色々な店を見て回った。

まあ、高校生ってお金使って友達と遊びに行きたい時期だから、
いつも金欠なのよね。こういう事するのも高校生ライフが関係し
てるんじゃないかな？

売り物を見てファージよりも物価が高いなと思ってたら、聞き覚えのある声でした。

聞き覚えはあった気がしたけど、私の事を呼んでなかったみたい

なのでもちろん無視。

「高梨!!」

どんどん声がこつちに近づいて来ているような気がするけど、リ
コリスという私の名前を呼ばれてないのでやっぱり無視。

「高梨、無視すんじゃないよ!」

「高梨って誰…って、え!？」

声の主は私の肩を強引に引つ張った。

私は高梨なんて名前じゃないから人違いだつて訴えてやろうと思
ったけど、相手の顔を見たらそれも言えなくなつた。

だつて、目の前にいるのは…

「ルキア…?」

「それ以外誰がいるんだよ」

目の前にいる黒髪の青年は、高校で私の隣の席にいた天城ルキア
(アマギルキア) だつたのだから。

「それよりも、何でシカトしたんだよ?」

「え!？私の事呼んでたの?」

あくまでも私は名前を覚えていないから、自分の事を呼ばれても
私の事だと分らない。

ルキアは名探偵みたいに左手を顎にあてて考え込んだ。

その後、私の腕を掴むとそのままスタスタと何処かへ行こうとす
る。

「え！？どこ行くの？」

ルキアは何も言わずに私を引っ張って行った。

|||||

「へえ、じゃあ今はリコリスって名乗っているのか」

「うん、そう。自分が呼ばれてたなんて思ってたの。ごめんね」

ルキアに連れて来られたのは喫茶店だった。場所を移したかったらしい。ちゃんとやってくれればいいのに。

ルキアは二年前に私みたいに遥に突き落とされてここに来たんだって。で、遥からの課題（後日発表）をクリアすれば自由にこつちとあつちの世界を行き来できるらしい。ちなみにルキアはこの国の騎士団長なんだって！…凄い。

さっきルキアが言ってた高梨はお察しの通り私の名字です。久しぶりのクラスメイトとの世間話で盛り上がっていたら、過保護なあの方の声がしました。

「リコリス、こんな所でな」…」

「ラグ？どうしたの？」

ラグは私の後ろを見て、固まった。

「こんな所に何の用だ？『紅蓮』のラグ」

「それはこつちの台詞だ。俺んとこのリコリス連れて何してんだ？」

『氷刃』ルキア」

えっと、ラグとルキアは知り合いなの？それとなんだか二人が怖い。

このままだと、私に死亡フラグが立ちそうなので店からそつと退散させていただきました。

第十二話 隣のアイツは騎士でした。（後書き）

新キャラクター登場です！

タイトルの『隣のアイツ』は隣の席のアイツって意味でした。

ルキアの他にもあと三人はリコリス達の世界からのトリッパーを登場させようかと考えています。

『紅蓮』VS『氷刃』えっと、二つ名って何ですか？（前書き）

読み辛かったらごめんなさいm（――）m

『紅蓮』VS『氷刃』えっと、二つ名って何ですか？

喫茶店から出て離れると、喫茶店から二人が飛び出して来た。

通りまで出てくるとラグは長剣をルキアは刀を抜いた。…って刀あるの！？

嫌な予感がしたから、とりあえず周りに被害が出ないように結界を張る事にする。

「空間を切断せよ『ゲージ』！」

ドーム状の幕が私達三人の回りを覆う。結界張るのって辛い。これだけで結構疲れた。

対峙してる二人はそれぞれの武器に魔力を込めた。

『凍てつけ！！』

『燃えろ！！』

詠唱すると二人の武器に変化が表れる。ルキアの刀は白銀の氷を纏い、ラグの長剣は紅い炎を纏っていた。

何の合図も無く二人が動き出す。

―突いて

捌いて―

下段からの切りかかり―

―跳躍して空中へ

―一回転して

―上段からの切り落とし

受け止めて―

―お互いの魔力がぶつかり合い

二人の間で火花が飛び散る―

弾き飛ばして―

一足で間合いを詰める―

私は二人の闘いに見とれていた。隙の無い攻撃にしなやかな動作…。まるで二頭の聖獣が舞い踊っているようで、一瞬一瞬に目が離せない。

何時もは過保護なアイツと隣の席だったアイツがこんなにレベルが高いだなんて思ってたなくて、今の二人と私は違う次元にいるような錯覚すら覚えそうだった。

って、あれ？待てよ、確かコイツ等って決闘じゃなくて喧嘩してんだよね？と言うことは……止めないといけないんじゃない？！そのことに気づいて慌てて詠唱する。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』！！」

ラグ達の足下に黒い魔法陣が出現してそこから出てきた黒い触手が彼等の手足に絡まる。もちろん、二人は身動きがとれなくなる。

「おい！高梨、何すんだよ！」

「リコリス、何で俺まで！？」

いきなり縛られて状況を把握できてない二人に、溜め息を吐きながら説明する。

「喧嘩だけで剣を抜くなんて本当に二人共馬鹿！？オマケに魔力まで使って……。私が結界張って空間を切り離さなかったら、街に被害が出てたかも知れないのよ！特にルキアは騎士団長なんだからその辺気をつけなさいよ」

お説教をされて二人共うなだれている。反省はしているようだ。だから『バインド』を解いてあげて二人を見た。

「いい？もう馬鹿な真似はしないでね」

今度は優しく言う。二人も弟がいるみたいでちょっと面白かった。

「はい……………」

二人揃って返事する。うん、揃ってるとなんだか気持ちいい！
結界を解いてさっきまでとは別の喫茶店に入る。だって、さっきの喧嘩の後で同じ店に入れる訳ないじゃん。
店に入って席についてすぐ、疑問を二人にぶつけてみた。

「ねえ、ラグの『紅蓮』とか、ルキアの『氷刃』って何？」

私の疑問に答えてくれたのはラグだった。

「二つ名って言って、歴戦の戦士達に与えられたあだ名みたいなものかな？二つ名はその人の特徴に合わせられる。俺なら髪の色と得意な魔法から、その阿呆騎士は戦闘スタイルから付けられんだ。ちなみに、傭兵や騎士にとって二つ名を持つ事は一種のステータスだから、持てるようにみんな努力してんだ」

私は納得した。ニコニコしているラグに対してルキアは額に青筋がたっているような気がするけどあえてそこはスルーした。

怒りを露わにしないのは成長した証しか？

「それにしても、高梨の魔法は凄いな。流石、賢帝シオンの妹だな。兄貴も兄貴なら、妹も妹だな」

ルキアの問題発言、いや、通りこして爆弾発言で私もラグも固まった。

どうやら兄、タカナシシオン高梨紫苑も遙によってこちらに飛ばされていたようです。

第十四話 俺自身の変化（ラグ side）

ファーストランドに来てリコリスと別れた後、俺は情報屋に来ていた。

「城の状況を聞きたい」

「はいよ。んで、どのくらい聞きたいんだ？」

予めポケットの中に入れておいた金貨を出す。その数は三枚。ギルドランクAの俺は、このくらいなら平気で出せる。それにあまり使わないから貯金額もかなりのものだ。

ちなみに、ギルドランクは下から順にG、F、E、D、C、B、A、SでAランクは俺を含め三人、Sランクは歴代で一人だ。“歴代で”というのは、Sランクだった“シオン・タカナシ”は隣の帝国リーゼアの皇帝で現在Sランクは空席の状態だからだ。

「今回も結構な金額だな。交渉成立と言うことで、それじゃあ、何から話そう?」

[illegible]

あれから数時間経って、現在俺は街の中心部に來ていた。もちろん、リコリスと合流するためだ。

さっきの情報屋の話によると、国王は現在も第一王子ラグナスを探しているらしい。まあ、レスト王国の民の生活が良くなるか、反乱を起こせる程の力がつくまでは帰るつもりは無いと思うけどな。情報を整理しながら先へ進む。俺はリコリスに早く会いたくて仕

方がなかった。

やっぱりここ最近、俺は何か変だ。気がついたら何時も彼女の事を考えている。今は何してんのか、何処にいるのか、俺の事はどう思っているのか……。彼女の事が知りたくなる。

『他人に対しての興味が焼けてなくなっていたと思っていたんだけどな』

新しい自分の一面に思わず溜め息が出てしまっていた。

街を一人でぶらついていると、一つの喫茶店に目がついた。シンブルで静かな雰囲気のごく普通の喫茶店だが、窓側の席にリコリスがいた。

「リコリス、こんな所でな」

「ラゲ？どうしたの？」

入ってすぐ、リコリスの向かいにいる奴に驚いた。リコリスがいたのはいいけど何でテーマまでいんだよ！俺が探していた人物と一緒にいたのは、レスト王国騎士団団長ルキア・アマギだったからだ。しかも、リコリスと凄く楽しそうに話していやがった。

リコリスが何時もは俺に見せてくれない表情を他の奴が見ているのが凄く悔しくて、腹が立っていて、心臓が締め付けられたように苦しかった。

俺の視線を追って後ろを向いたリコリスが固まった。

「こんな所に何の用だ？『紅蓮』のラゲ」

「それはこっちの台詞だ。俺んとこのリコリス連れて何してんだ？」

『氷刃』ルキア」

ルキアが現れた二年前から中が悪かったためか、喧嘩ごときで剣

を抜いてしまふのは言うまでもないと思う。

|||||

結局、リコリスの魔法によって俺達の喧嘩は止められてしまった。リコリスのお説教を食らい、反省した後別の店で話していた時、あの阿呆騎士は爆弾発言を投下してくれた。

「それにしても、高梨の魔法は凄いな。流石、賢帝シオンの妹だな。兄貴も兄貴なら、妹も妹だな」

嘘だろ！？リコリスがああ賢帝シオン・タカナシの妹だなんて！確かにいとも簡単に上級魔法を発動させるから、きっと特別なヤツだと思っていたけど、まさか元Sランク傭兵現皇帝の妹だとは思ってもいなかった。

溜め息をついたりリコリスが最初に口を開いた。何か苦虫を噛んだような表情しているけど、大丈夫か？

「ねえルキア、あの駄目兄貴が一体何処にいるか教えてくれる？」

リコリスの発言から、賢帝と呼ばれているシオンが実家ではかなりの駄目っぷりを発揮していたことがわかる。何か意外だった。

「隣の帝国リーゼアにいる。良かったら、妹姫扱いで騎士団が安全に連れて行ってやることできるけど、どうするんだ？」

阿呆騎士の誘いに動揺しているリコリスが、俺の方を見てきた。「どうした？」って聞くと彼女は

「私はルキアのお言葉に甘えようと思うけど、ラグはどうする?」

って言うてきた。俺の心配をしていたらしい。凄く嬉しかった。だから答えは…

「もちろん、一緒に行くぜ!」

俺の答えに嬉しかったのか、リコリスが笑顔で俺に飛びついて来た。俺の顔が一気に熱くなってリコリスに聞こえるんじゃないかというくらい胸が高鳴った。

そんな様子を見ていた阿呆騎士が一言呟いた。

「あの『紅蓮』が、なあ……」

俺はアイツの言った意味を理解することができなかった。

第十四話 俺自身の変化（ラゲ side）（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ポイント評価や誤字指摘などしていただけると嬉しいです！

第十五話 謁見反対！！容量オーバーです。

「あの『紅蓮』が、なあ……」

一緒に来てくれるってラグが言ってくれて嬉しくて思わず抱きついちゃった時にルキアがぼそっと呟いた。え？ラグが何て？よく聞こえなかったんだけど。

まあ、いいや。それより今後の予定を確認しなくちゃ！

「ねえルキア、出発は何時にするの？」

「そうだな……一週間後になると思う。それまでに隊を編成しなきゃなんないし、高梨には陛下と謁見して貰わないと……」

「おい！何でリコリスがレスト王に謁見しなきゃなんねーんだよ！」

私もびつくりしたけど、ラグが過剰反応したのは何で？やっぱり過保護だから？

ルキアは溜め息をついて、呆れ顔だった。

「少なくとも、馬鹿傭兵なら分かるだろ？」「誰が馬鹿傭兵だって？」
あー高梨、そいつの事は無視してて良いぞ。えっと、お前が妹姫として俺達がリーゼアに送るなら、当然、陛下にも説明しなきゃなんなくなる。結果的には証明するために高梨も陛下に謁見しなきゃいけない」

ルキアが言った事は理解できたけど、妹姫というだけでこの国のお偉いさんと対面しなきゃいけないのは平凡を貰きたい（この時点でアウトだと思うけど）私には無理。

真剣そのものでルキアを見る。

「ごめん、やっぱりいいや。私にはそんな度胸無いし兄さんの所へ行きたいだけだから」

そう言うこと、真面目だったルキアの顔が微笑んだ。

「良かった。高梨ならきつとそう言うってくれると思ってた。東条の奴から陛下には合わせるなって言われてたし」

「遥から？」

遥からそういう連絡が入っていた事に驚きを隠せなかった。

遥の事はもう許してるけど、あの時の憎しみのこもった笑顔の意味が未だに分かっていないのが現状だった。遥との連絡方法があるのなら何時か分かるよね。

「ああ。詳しい事は此处では言えねえけどな。丁度良い機会だし、紫苑先輩にも呼ばれている事だし、騎士団辞めてお前達に付いて行くよ。良いだろ？」

そういえば、ルキアも兄さんと同じでバスケット部だったんだっけ？ルキアにとっては兄さんは尊敬できる人（私はそんな事一欠片も思っただけ）だから“高梨先輩”ではなくて“紫苑先輩”って呼んでるんだって。

一緒に来るぶんには、私は構わないけど…。そう思いながらラグの方を見た。ラグは難しい顔をしてたけど、答えが見えたのか一つ頷いて口をきった。

「正直、ムカつく奴だけど頼りがいはあるからな。お前、ゼツテリコリスに変な事吹き込むなよ！『氷刃』」

ラグってルキアの前では素直になれないだけなんじゃないかな？

だつて今、ルキアの事認めてみたいだから。
私は二人の手を握って笑った。

「それじゃあ宜しくね！ラグ、ルキア」

二人はちよつと驚いてたけど、笑ってくれた。うん、二人の笑った顔が大好きだよ。

「ああ、宜しくな。ラグ、“リコリス”」
「俺も。宜しく。ルキア、リコリス」

なんだかんだで仲の良かった二人と兄のいる帝国リーゼアへ向かう事になった。何か凄くドキドキする！

第十五話 謁見反対！！容量オーバーです。（後書き）

お気に入り登録＆評価して下さった方ありがとうございますm（
ー）mまた、感想や誤字指摘などありましたら宜しく願います！
す！

これからも当作品を宜しく願います！

第十六話 仕事を見つけました。

♪ 薄桃色の花咲く丘

僕等巡り会えた奇跡

一緒に笑い合うことが

僕の日常になってました♪

さつきできたばかりの歌を歌ってた。

あれから、ルキア達と今後の事を話し合って、私とラグは宿へ来た。もちろん、ファージの時と同じで私の部屋はラグの部屋の隣だ。宿ではやる事が無かったから結局こうやって歌を作っていた。

「リコリス、ラグだ」

「開いてるよ!!」

歌っていたら、明日の予定を伝えにラグが部屋を訪ねて来た。ファージの時は私が寝てる時に来たらしくて、次の日に予定を伝えたらグを叱ったから私が起きてるこの時間に来てくれたのかも。ちょっと成長したのかなって思うとなんだか見ている方も嬉しかった。

「明日は予定通り傭兵ギルドに行つてリコリスの登録と仕事を探そう。そういえば、ギルドランクについては話したよな？」

「うん、私は背理たてだからランクGなんでしょ？」

正解とも言つようにラグは頷いた。

確認が終わった後、何かを思い出したようにラグが私の顔を見る。

「どうしたの？」

「いや…さつきリコリスの歌が聞こえたから、また新曲できたのになって思っただけだぜ？」

ラグの答えに顔が熱くなった。もちろん、羞恥心で。

ラグにも聞こえてた。外にただ漏れ。超恥ずかしい！

いやああああ！ハズい！ラグならまだしも他の人にもきつと…。

うなだれている私の心境を知らないラグが今の状況の私にとっての禁句を言ってくれちゃいました。

「あの歌、もう一度歌ってくれねえか？」

恥ずかしいから嫌！って言おうとして顔を上げたけど、真剣な翠色の瞳が私の意見を封じてしまった。

そこまで見つめられてしまったら、流石の私もギブアップです。

「もう、しょうがないんだから。でも音漏れするのやだな…」

「じゃあ、消音の魔法をこの部屋にかければいいだろ？」

ナイス、ラグ君。その考えは有りませんでした。その案を実行すべく、ラノベ知識からイメージした。

「溢れ出る音を遮断せよ『サイレント』！」

一瞬目の前が光ったけど、何事も無かったかのように収まった。

これで音漏れしない筈。嗚呼、なんて素敵なの魔法って！

口には出なかったけど表情には出たかも。だってラグ、今にも吹き出しそうだもん。

「それじゃあ、歌ってくれ」

一つ頷いて、息を吸った。

♪ 閉じた瞼開いたら

全て新しい世界へ踏み込んでた

何もできない僕は

一人ただ悲しくて泣いてた

風のような君の手を掴んで

駆けるように僕の目に映る世界は

温かいもので溢れてる

それを教えてくれた君に伝えたい

胸に秘めた君への感謝

精一杯に伝えようとした

風がまるで悪戯のように

僕の言葉をかき消しました

薄桃色の花咲く丘

僕等巡り会えた奇跡

一緒に笑い合うことが

僕の日常になってました♪

[illegible]

私達は現在、王都の傭兵ギルドにいます。今日の目当ては仕事探しと私のギルド登録。

「ようこそ、傭兵ギルド王都本部へ」

受付のお姉さんに挨拶されて思わず私もお辞儀をしてしまった。

「彼女の手続きをして欲しいんだけど…」

「可愛いお連れさんですね。畏まりました。ここに必要事項をお書き下さい」

可愛いお連れさんと言われて恥ずかしくて私は俯いてしまった。そんな私を見たラグは少し笑うと、私の代わりに書類を書いた。この世界の字はアルファベットに似てたけど、やっぱり覚えられなかった。（読むことはできるけどね。）

書き終わった書類と引き換えに桃色のカードが渡された。

・
・
・
・
・
・

名前：リコリス

職業：魔法士

ギルドランク：G

・
・
・
・
・
・

私の名前と職業とギルドランクが書かれていた。いわば身分証明書だね。ラグから聞いた話によると、検問所で見せればパスできるんだって！

これで私もラグのお手伝いできるね！

第十六話 仕事を見つけました。（後書き）

今回も活動報告に歌詞を掲載しているので興味のある方は覗いて見て下さい。

第十七話 初の依頼です。

受付で登録を終えた後、ラグが奥の方へ歩いて行くのを私も後に続いて奥の方へ行った。

ギルドの奥には大きなコルクボードが八つあって、一つだけ除いてどのコルクボードにも沢山の紙が貼ってあった。多分あの紙に依頼が書かれているんだと思う。さっきから気になっていたコルクボードを見ていると、私の視線を辿ったらしいラグが説明してくれた。

「あのボードにはSランクの依頼が貼ってあったんだけど、今はSランクだけは空席だから何も貼って無いんだ」

「どうして今は空席なの？」

「前にも話したと思うけど、Sランク傭兵はギルド設立以来一人だけ。そのSランクだった人は現在は別の仕事をやっているから……だな」

そう言っ、ラグは何も貼って無いコルクボードを見ていたけど暫くして何かを納得したように頷いて別のボードの方へ行ってしまった。慌てて追いかけてようとして思いっきりつまずいてしまった。

「どわあああ！！」

私は衝撃を予想して目を閉じたけど一向になくかった。それにお腹あたりに固い棒のようなモノが支えていた。

私が顔を上げるとそこには

「大丈夫か？」

ラグの顔がありました。しかも、ち、近い！もう、ショート寸前です。思考停止しそう…。

「だ、大丈夫だから！」

「本当か？」

「本当だもん！」

私はラグから離れると、依頼が貼ってあるボードの一つに行こうとした。……………うん、行こうとしたんだよ。

Gランクの依頼があるボードを見ようとしたらいきなり（もちろんラグに）掴まれて引っ張っていかれた。

「俺も一緒に依頼受けるから、ランクDあたりから選ばうぜ！」

「や、私ランクG…」

「実力がありや、問題ねえって！」

「大ありですから……！」

周りの人達は何か微笑ましいものを見るように笑っていた。ラグが他人に興味を示すどころか世話を焼く事すら今まで無かったかららしい。

後になって他の傭兵の人に聞くまで私は知ることは無かった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

そのまま引っ張られて私は今、ランクDの依頼があるボードの前に来ています。

当然のことDランクの依頼を受けるつもりは無かった私は、適等に依頼を見てたけど、隣の青年ラグはファージの武器屋の時同様目

を輝かせて依頼を選んでいたのでした。

思わず「子どもかつ!!」って突っ込んでやりたい所だけど、私自身どういう依頼がいいのかさっぱりで、馴れてるラグに任せているような状態だから突っ込もうと思っても突っ込めない。

暫くすると、ラグはボードに貼ってあった紙を一枚選んで私に差し出してきた。

「こんなのはどうか?」

「ん? 何々...」

ラグから紙を受け取って内容を確認する。確認した瞬間、叫びたくなったけど、なんとか押し止めた。

・
・
・
・
・
・

依頼難易度：D

依頼内容：“精霊の森”でエレメントの討伐

報酬：銅貨五十四枚、一人あたり七十ギルドポイント

・
・
・
・
・
・

現代日本人の私には無理そうな依頼内容だった。でも、他の依頼内容に比べて報酬が結構高い。日本円にするとざっと五千四百円くらいだった。

ラグに面倒を見て貰っている身だから、本人はいいと言っていても返した方が絶対良いに決まってる。ならば背に腹は代えられない。

「ラグ、私この依頼受ける！」

「分かった。無理するなよ」

微笑んだラグは私の頭をそつと撫でると依頼受託の受付をしに行
った。その彼の背中がやけに広く見えた。

第十七話 初の依頼です。（後書き）

ちなみにギルドポイントは、ランクを上げるための点数で

G ↓ F 100ポイント

F ↓ E 500ポイント

E ↓ D 1000ポイント

D ↓ C 2500ポイント

C ↓ B 5000ポイント + Bランククエストクリア

B ↓ A 10000ポイント + Aランククエストクリア

A ↓ S 100000ポイント + Sランククエストクリア + オーナ

ーズクエストクリア

という条件でランクが上がる設定になっています。（本編にもそのうち記載予定）

そう考えると馬鹿兄紫苑はすごかったんですね…。

第十八話 紫苑という名の男について

依頼を受けた後、早速私達は精霊の森へ向けて出発した。

精霊の森は王都の北門を出てすぐの所にある小さな森で、依頼はすぐ終わるんだって。精霊や霊獣が生息しているから“精霊の森”と言っらしい。

とても幻想的な所なんだけど、最近は瘴気の影響で魔物化した精霊“エレメント”が増えてきているから立ち入り禁止になってしまっているんだとか。

王都の北門へ向かう途中でラグが私に話しかけてきた。

「今、空席になってるSランク傭兵ってさ、シオンだったんだよな」
「えっ!？」

あまりにも唐突な言葉に私はラグの方を見てしまった。今までどうしようもないと思っていた兄が、こちらでは伝説に匹敵するような武勇伝を更新し続けているのだから。

隣の国の皇帝陛下って言うだけでも度肝を抜かれたのに（本人いないけど）

ただ一人のSランクというケタ外れなランクまで持っていたと聞いて腰を抜かさない人がいたら、今すぐにでもこの話を聞かせてやりたい。

そういえば、こっちでの兄について私は何も知らない。『シオン』と呼んでる時点でラグは兄と仲が良いと判断した私は思い切って兄のことを聞いてみることにした。

「ねえラグ、こっちでの兄さんってどんな感じだったの？」

「こっちでのシオン？えーっと一言で言えば掟破りなヤツだな」

ただ一言『淀破り』と言われてもピンと来なかった。私の様子を
見てたラグは悪戯が成功したかのようなにやついた顔をした。

「道すがら、アイツのことについて教えてやるよ」

「ありがとう！」

笑ったラグに私も笑って返す。

二人してニコニコしてたから端から見ればどこぞのバカップルだよね。そんな関係じゃないのに……。

[illegible]

森へ続く街道を歩きながらラグは兄のことを話してくれた。

「傭兵シオンは、剣の腕も魔法の腕も凄くて頭の切れる傭兵だったんだ。パーティーを組んだ時的確な指示を出していたのはシオンだったし、必要ならば援護にも回った。兎に角何でもできるヤツだったよ」

自慢気に言うラグの方をまじまじと見てしまった。家にいる時の兄とは全くの別人のよう……ううん、全くの別人だった。

「仕事しか頭に入ってたみたい動き回ってたな。あ、一回だけ働きすぎでぶっ倒れたんだっけか？」

やっぱりそうだ。私の知ってる兄とは違うんだ。
なんとなく道の脇を見たらこの世界の紫苑の花が咲いていたけど、

部屋の窓辺に飾ってたのとどこか違って見えたのに対してなんか寂しかった。

「特異点だったみたいで、見たこともない生き物を出したりしてたり、再生能力とかあったり…」

「ちよつと待った！」

「ん？どうした？」

「一体何の話してるの？」

「シオンの話しだけど」

何ですか！？ウチの馬鹿兄貴は人外化け物ですか！？って、『掟破り』はそこか！召喚術？再生能力？どういう違法ソフトウェアを使ってくれたんですか！？何ですかそのチート設定。よっぽどのことが無い限り無敵じゃないですか！

他人どころか人ですら無いような錯覚を覚えたのは私だけだろうか。うん、今度ルキアに聞いてみよう。

目を白黒させたり百面相をしてる私を不思議に思っていたラグは今度は質問をしてきた。

「そつえば、リコリスのいた世界でのシオンってどんな感じのヤツだったんだ？」

私は一言だけ答えた。

「駄目人間」

「えっ？」

私の一言に驚きを隠せないラグの顔が可笑しくて笑ってしまった。私のいた世界での兄の話しようと思ったけど、その前に精霊の森へついてしまった。

第十八話 紫苑という名の男について（後書き）

実は、この小説を読んでくれた友人からアドバイスをもらって十七話からちよつと改善してみた（あくまでも作者はそのつもり）のですが、正直のところどういいうふうにしたら読んで下さっている皆様に楽しんで頂けるか自分だけだとよく分からないんですね…。

ということ、
「ここをもつ少しこついうふうにしたほうが良い！」
とか

「こつしたらきつと面白い！」

などのご意見ご感想をお待ちしております！

P・S・よろしければポイント評価の方もお願いします!!

第十九話 精霊の森で。（前書き）

投稿が遅くなつてごめんなさい（T^T）

第十九話 精霊の森で。

結局、私の世界にいた時の兄の話ができなかった。ラグの驚いた顔が見れなかったのが残念だよ。

「それじゃあ、リコリス入るぞ」

「うん」

私達は神聖な筈なのにどこか暗い森の中へと入っていった。

森の中へ入って行つて、私達は愕然とした。とても幻想的な筈なそこは、黒に近い紫色の霧が禍々しさを醸し出していて近寄りがたい雰囲気だった。

その雰囲気のせいなのか無意識のうちに一步下がってしまった私の手をラグはぎゅっと握ってくれたけど、微かにラグの手は震えていた。

意外だった。やっぱりラグにも怖いものがあると思うと何故だかほっとしてる私が出た。

ラグと私の目が合つて、お互いに微笑んで頷く。そして、私達は手を堅く繋いだまま森の奥を目指した。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「岩よ、彼の者を砕け『ロックシュート』！」

私の目の前に魔法陣が展開されてそこから十数個の拳くらいの大きさの岩が生成された。

「行け！」

号令と共に開いている左手を相手の方へ突き出すと拳くらいの岩は突き出した方へ飛んで行った。

紫色の水晶が集合したような魔物エレメントは私の放った岩の飛ぶ礫に当たって、次々に砕け散った。

エレメントは属性で色が別れていて、赤が炎、青が水、今倒した紫が雷、橙が地、緑が風、黄色に近い白が光、紺に近い黒が闇、色が無くて透明なのが無なんだとか。もっとも、光、闇、無についてはめったにいないらしい筈んだけど…。

一方、私の後ろではラグが風属性を相手にしてた。

『燃やせ！』

ルキアと喧嘩した時のように長剣に魔力を流し込んで、一気に畳み掛ける。目に留まらぬ速さで一閃する。ラグの速さに追いつけないのか長剣に纏わせた炎が尾を引いて剣の軌跡を辿った。

炎の軌跡が消える前に次々に一撃を加えていく。ラグの周りの炎の線が龍が舞っているように見えた。

って、そんなボーツと見てる場合じゃなかった！錐がないっていうくらいの数のエレメント達が次々と攻撃を仕掛けてくる。

「バリア！」

面倒なので詠唱破棄。私の前に透明な壁が展開されて、エレメント達の攻撃を防いだ。

私は早口で詠唱する。

「水で生成されし矢よ、

来たれ闇に染まりし剣よ、
破邪の力をその身に帯びて、
妖魔が宿ししその力にて、
魔なる者を貫け
偽善の光をかき消せ
『スプラッシュアロー』！
『ダークネスソード』！」

流石に二重詠唱は長い！時間を凄く費やした気がしてなりませ。
私の正面には青い光を帯びた魔法陣が、エレメント上空には黒い魔法陣が浮かび上がった。次の瞬間、青い魔法陣から無数の矢が、黒い魔法陣から無数の剣がエレメント達を襲った。
そこにいた炎のエレメント達とめったにお目にかかることのない筈の光のエレメント達はガラスが割れるように砕け散った。

「この辺りは終わったみたいだよ、ラグ」

そう言つてラグの方へ寄つて行つた。ラグは剣を納めながら私の方を向いた。

「これじゃあ、錐がないな。浄化の魔法が使えたらいいんだけどな」
「そんな魔法があるの！？」
「あるにはあるけど…」
「今まで通りイメージすればできる？」

ラグに浄化の魔法があると言われ、思わずラグに迫ってしまった。慌てて私は身を引いたけど、ラグはその後固まっていた。

「ごめん。で、ラグ聞ってる？」
「ああ、悪い。ちゃんと聞いてた。できない事はねえけど、魔力も

かなり使うし、イメージしにくい」

「分かった、ありがとう！駄目もとでやってみる」

「ああ、分かつ…、ええ！？オイ、ちよつとまて…」

私はラグの近くから離れるとすぐに詠唱を始めた。

「天地を包む清めの光よ、此处に集え。いかなる者にも苦しみを与える邪気を払い、この地の命の流れを戻せ『クリアブレス』！！」

私が叫んだと同時に私を中心に魔法陣が森の隅まで展開されてそこから真つ白な光が発せられる。あまりにも眩しい光に目を開けられなくなった。

第十九話 精霊の森で。（後書き）

ポイント評価やご感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1362y/>

彼岸花の恋歌

2011年12月1日18時50分発行